

汲古一七

『扇のはなし』

遠い時代の絵巻物や風俗屏風など見ると、辻に立って何か見ているみやび男が、扇で顔をかくし、骨の間からかいま見るようにしている姿はちよつと心をひかれるやさしさがある。これはまともに物を見つめる無礼を避けたもので、むかしの人の市民的教育がほの見えるてゆかしい感じがする。

また上棟式の祝い飾りに使われる車型の扇飾りも、古い時代には祭りにも使われているようで、いわれは何とでも作つてあろうが、あの形によさから、末広とコジ附けたものに相違ない。

『十訓抄』の中に出てくる扇合わせの競技などはいかにもものびやかなむかしの生活が考えられるもので、左右の組に別れて目を限つて作つてきた美しい扇を持ちよつて、その美しさを競いあつて、肉筆の美しい描き絵や蒔絵の骨などを誇る中に、黒漆塗りの高骨に黄色の紙を上よりに貼つて、これに楽府の句をぬき書きにしたものがひとつあつたのを、判者の天子が特に取りあげられて、これはひとさわに優れたものだど賞揚しているのであるが、これは実に今考えても美事であると、その洗練された作者、判者の美の眼の高さに驚かされるよい逸話である。

しかし私はこの話の中から、扇に意匠をこらしてものを書く、ことに詩や歌を書くということが、こんな古い時代にすでにかなり高度に達していたことを推知するのである。もつともこのことは、四天王寺の有名な国宝の扇面下絵経のようなすばらしいものから、降つて、国立博物館の珍藏中の珍藏である俵屋宗達(たわやむねたか)の扇面ちらしの屏風など、たしかに美術品の中に有名な扇を基にした美術があるから、いまさらこと新しく驚異というのではないが、この扇を絵や詩歌を書くためのキャンパスとして考えた工夫には、古い時代の人達の考へに時々敬意を表したくなるのである。

曲線の天地を持つ、しかも下に狭く上に広い料紙に、書画を入れて観賞に独自の境地をひらいた芸術は、方形の料紙に描かれたもの

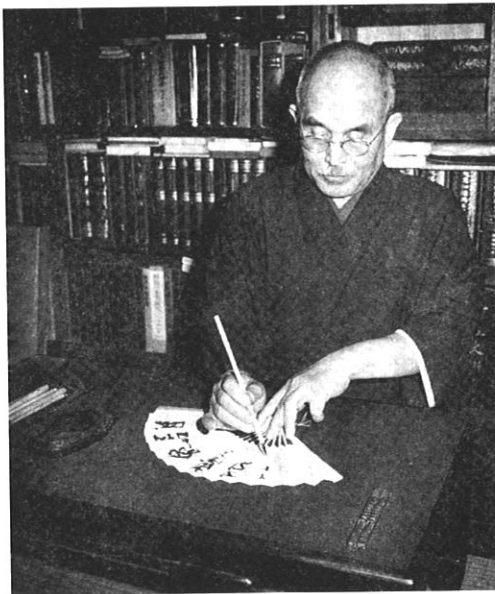
より、何となく流動的な味わいがあつて固い感じがしない特点と、中に入れた書画も、その傾斜に副つて何か潇洒な趣致が盛られ、東洋人好みの詩境や画境に叶つていようである。

このような特種な輪郭をもつ料紙であるために、この便面すなわち扇面へものを書くためにも、自然いろいろの口伝なども生まれてきている。今日では口伝だの秘伝だのということは全くお笑い草であるが、ただその口伝らしいものはたしかに、この局面に字など入れる時にピタリと箝まる技術的急所を押えてあることはまことに驚かされるのである。

たとえば、歌や俳句のような仮名書きのものは下方を基準として下へ揃え、上は上がり下がりにして散らし書きにするのがよく。漢詩や漢文などのものは、上方を基準として、上よりに揃えて字数も数の排列を大体揃えた方がよいというのは、文学に縁のある人々には、有り難い急所であらうと思う。

さて話については自分の好みに落ちてしまったので、退屈を買わないうちにこの辺でやめることにいたしました。

〈『たかむら』、昭和五十九年七月〉



書齋で扇面に揮毫される中村素堂先生